



アイデア次第でもっと楽しめる 浮世絵・錦絵、2つの事例。

Clip & Think

博物館の非日常性をさらに強調 島根県立美術館の面白い試み

5月7日、島根県立美術館で開催された「四大浮世絵師展」の来場者数が、4月21日の開幕から累計1万人を突破したという発表がありました。写楽、歌麿、北斎、広重の作品約170点を展示する同展は、目標を上回るペースの来場者を集めているとか。浮世絵の根強い人気を実感できるデータですね。

さて、同展では、関連イベントとして開催された「ナイトミュージアム」も話題を集めました。北斎の傑作「百物語」に合わせて、薄暗い館内にロウソク型の照明や行灯のあかりが灯る中、の地元の劇団が怪談噺を朗読するという趣向。参加者は40人で、募集にはその4倍を超える応募が集まったとのこと。

夜の博物館と言えば、一般市民にとっては縁の薄い場所。サスペンス映画などでは「事件の舞台」としてお馴染みですが、実際に足を踏み入れることはほとんどないでしょう。そんな中で、敢えて怪談と組み合わせた島根県美の企画は、とても面白い試み。主催者に名を連ねた地元紙の報道を見ると、イベントも大成功だったようです。

考えてみれば、ミュージアムは「非日常」の最たる場所かもしれません。その空間性と展覧会のテーマに工夫すれば、人々を驚かせるアイデアもまだまだ眠っているのかも。ちょっと勇気づけられるニュースでした。

<http://www.sanin-chuo.co.jp/news/modules/news/article.php?storyid=519540004>

Clip & Think

シンプルだけど楽しい！ 錦絵解説の新しい手法

インターネットを通じた情報配信は、公共機関にとってはもはや避けられない必須要素。中でも、市民が共有する財産を預かるミュージアムにとっては、欠かすべからざるサービスとなりつつあります。とは言っても…作品を「どう見せるか」については、議論のあるところ。最近の潮流である動画という形態までは行かなくとも、多くの方々に興味をお持ちいただける方法を考えたいものです。

そこで、なかなか凝った「見せ方」を実践しているサイトを、ひとつご紹介いたします。渋沢栄一記念財団が運営する Web サイト「実業史錦絵絵引」では、写真技術が定着する以前の實業にまつわるシーンを描いた錦絵を公開するギャラリーを解説中。1枚の錦絵に対し、中で描かれている人物や道具ごとに解説を掲載しているのですが、単に大きな画面で絵が見られるだけでなく、知りたい対象物のリストにマウスのカーソルを合わせると錦絵内の該当部分だけが浮かび上がる仕組みになっています。以前なら絵の中に番号をふってリストと照合させたものですが、Flash 技術を使うとシンプルながら効果的な紹介が可能になるというわけです。

大掛かりな演出でなくても、工夫次第で楽しい「見せ方」はまだまだあるもの。ミュージアムの関係ご各位にもご参考になるのではないのでしょうか。

<http://ebiki.jp>

● 編集後記

今回は大きく間が空いてしまいました…MAPPS Press の第4号をお届けいたします。特集の「第18回北海道美術館学芸員研究協議会 総会・研究協議」は、まだ雪が残っている3月の開催でしたが、発行までに4ヶ月も要した計算になります…(汗)。参加を快く

ご許可いただいた関係ご各位には、この場をお借りいたしまして改めて深くお礼を申し上げます。また、発行までに大変時間がかかりましたこととお詫びいたします。次号はもう少し早く出せるよう、スタッフ一堂、頑張ります…。 (担当：U/I)



館のさまざまな課題を、地域全体で考える。 北海道美術館学芸員研究協議会の取り組み。

ご存じの通り、いま、ミュージアム業界は決して追い風を受けているとは言えない状況にあります。資金的な側面もさることながら、人的な交流機会も多いとは言えず、各館が経済的な自立性の確保に追われる中では、むしろ「孤立」しかかっている館も珍しくないのが現状なのです。そんな中で、有志が集まって「協議会」を設立し、情報交換を行っている事例があります。

北海道美術館学芸員研究協議会は、北海道内の美術館に勤務する学芸員の皆さんが、それぞれ個人として参加する任意団体。財団法人や NPO 法人とは異なり、会員の方々の会費で運営されており、公的資金や企業からの助成を受けていません。そのため、どちらかと言えばサークル的な運営がなされていますが、組織基盤が強くない分、内部の結束感はなかなかのもの。仲の良い人々の集まりだからこそ、意思疎通もしっかりしており、実務上の情報交換や互助的な活動も活発です。

今年3月4日～5日の2日間、18回目となる総会が開かれました。予算などに関する話し合いの他、今年は「コレクションの活かし方を考える」というテーマで研究協議が行われ、活発な意見交換がなされました。そこで今回の MAPPS Press では、大変遅くなりまして恐縮ですが、同会の模様をお伝えいたします。

◎次ページ以降、劇的な進展の経緯とポイントをご紹介します！

学芸員は、もっと互いに助け合うことができるはず…

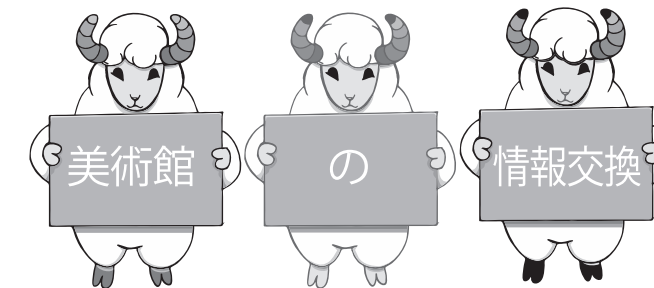
美術館の情報交換

多忙な日常を過ごしていると、ついつい情報に疎くなるもの。しかし、中には「疎くなる」では済まないケースもあります。たとえば、十分な職員数を確保することさえ困難な地方の小規模館では、新人職員への業務指導もままならないという事態も発生しています。そんな中で、各館が助け合って情報を収集・交換できる機会を設けている事例が、北海道の取り組みです。



第18回北海道美術館学芸員研究協議会

総会・研究協議 参加レポート



道内の学芸員が集い、活気あふれる議論を展開。 道立近代美術館で行われた総会にお邪魔しました。

18回目を数える今回の協議会では、予算決算など会の議事に加えて、「コレクションの活かし方を考える」というテーマで研究発表会が実施されました。奥岡茂雄会長（札幌芸術の森美術館館長）、佐藤友哉副会長（北海道立近代美術館副館長）も参加される中、活気あふれる雰囲気の中で行われた学芸員の会合に、弊社スタッフも参加。当日のメモをご紹介します。



実施日：平成22年3月4日～5日
会場：北海道立近代美術館映像室
参加者：会員のうち50～60名前後

テーマ：「コレクションの活かし方を考える」
発表館：道立近代美術館、道立帯広美術館、
札幌芸術の森美術館、道立三好好太郎美術館、
木田金次郎美術館

会場は熱気が満ちながらも和気あいの雰囲気。弊社もしばしの発表機会をいただきました。

若手学芸員に対して、ベテランがアドバイスとエールを送る場面も。
現場発の研究発表から美術館全体の課題まで、実に有意義なお話を聞けました。

■ 弊社参加スタッフのメモより抜粋

① 地域美術史について

●明治以降の道の美術史に大きな足跡を残した人々として、今回は「今田敬一」「なかがわつかさ」「島本融」が取り上げられた。彼らはいずれも本職は画家ではないそうで、順に研究家、評論家、コレクターとして知られる人物とのこと。

●島本融は、北海道銀行の初代頭取。美術作品を多数収集しているが、経済的成功者の趣味に留まらなかった。中央の画家を道に呼び寄せたり、地域の若手作家を支援したり、道立美術館の設立に尽力したりと、地域の文化水準向上に奔走したという。

●道立近代美術館は、今田敬一の遺族から研究資料の寄贈を受けた。2008年までずっと未整理のままだったが、北海道大学の学生たちが資料閲覧を申請したことを受けてファイリングを開始、展示会も実施。貴重資料は、やはり死蔵させてはもったいない。

② 地方美術館の展示会について

●札幌芸術の森美術館では、2006年から「B展示室」を設置。年に1回の収藏品点以外でも作品を活用したいという思いで常設展示室として開設したが、企画展の際にはショップにしたりすることもあるという。来館者にもっと浸透させる方法を考えてい。

●今年2月から4月の展示会では、1,116点のうち50点を展示した。コレクションの8割が寄贈作品なので、感謝を込めて1寄贈者につき1点ずつ出品するというルールを決めて企画したとのこと。なお、会期中6回開催した収蔵庫ツアーは好評だったとか。

●道立帯広美術館で「花」をテーマに開催した企画展について。絵画作品に加えて博物画や工芸まで対象に含め、道内各館から借用して開催した。総予算は、輸送費とその他（印刷や造作）費用が半分ずつを占めたそう。

③ 会の状況について

●室蘭に新設された美術館の若手学芸員が、展示会のテーマの立て方について質問していたのが印象的だった。質問に対しては複数の先輩学芸員が挙手し、多様な助言を行っていた。ノウハウ共有や館同士の助け合いに実効性を発揮しているように感じた。

●道立帯広美術館の企画展のように、多くを借用作品で賄う場合にも、会の交流の中で培った人間関係が大いに役立つことだろう。こうした機会はぜひ増やしていきたいものだ。

④ 地方美術館の危機感について

●地方分権推進委員会の勧告により、従来必須要件だった、「博物館資料」「学芸員」「建物と土地」を必須とせず、条例委任、つまり必須でなく自治体に任せるといったことになった。地方に判断を委ねられることは良いのだが…と副会長は以下のような問題点を指摘された。

●道立の美術館は、道では教育委員会から外れて知事部局に一元化されることが検討されているが、これによって美術館の役割に変化が生じるかも知れないという。中でも「教育現場への貢献」という大きな柱が外れる可能性があるとのこと。前述の博物館法改正を合わせて考えると、地方美術館は「作品ゼロ、学芸員ゼロ、建物ナシ」というイベントホールのような方向性も可となってしまふ。

●民間人である地方銀行頭取が地域文化の振興に尽力したところの状況と比較すると、地域文化という観点では、日本の政策は大きく退化しているように思えてならない…とのご指摘。

その他、ノウハウ共有や情報交換で学芸員同士が助け合っている光景は素晴らしかった。情熱や志が伝わってきて、感動した。